

「朝の女王と精霊たちの王ソリマンの物語」における 旧約聖書的モチーフについて

高橋典子

はじめに

1841年の狂気の発作によって作家生命および経済的、精神的にもダメージをおったネルヴァルは、42年の末、その狂気の記憶を払拭するために兼ねてから関心を寄せていた東方の地への大旅行を企てた。のちに父親宛の手紙の中で彼は「この旅行が作家としての意欲を立て直し、精神を解放しただけだったとしてもそれで十分です。」¹⁾と述べ、世間に対してもこの発作が突発的な事故であり、自分はその犠牲者であったに過ぎないことを証明すべく、帰国後ただちにこの旅の体験を作品にする努力を始めた。

そして、帰国直後の1844年2月、「アルチスト」誌(週刊誌)に「ギリシアの1日」をはじめとする4作品を、ついで46年から47年10月まで「両世界評論」に連載を続けた後、51年にシャルパンチエ書店から『東方紀行』2巻が刊行されるまで、実に7年あまりの歳月を要した。本稿で取り上げる「朝の女王と精霊たちの王ソリマンの物語」*Histoire de la reine du Matin et de Soliman, prince des génies* は全体の半分を占める挿話で、旧約聖書のモチーフを元としているが、そこにはフリーメーソンの伝説や聖書の秘儀的な解釈が含まれていて、ネルヴァル的な世界に作り変えられている。本稿では、ネルヴァルがどのように旧約聖書の記述を取り上げ、変化させているか主要な登場人物の役割に注意しながら考えてみたいと思う。

第1章 作品のモデルについて

はじめに、この挿話を聖書の記述と比較検討するために物語のモデルとなっているソロモン、シバの女王、そしてアドニラムが聖書の中ではどのような人物として登場しているかをみていこうと思う。

この挿話の簡単な粗筋は次のようなものである。

地下の火の霊の子で反逆的な創造者であるアドニラムがソリマンのエルサレム神殿の建築に携わっている。そこにシバの女王バルキスがソリマン訪問のためにやってくる。そこで2人は同じ火の霊の子孫であることを知り、互いに惹かれあう。アドニラムは「青銅の海」と称する巨大な作品の鑄造に全力を傾けるが、部下の裏切りによって失敗する。その時、地下の霊が現れて、彼にその素姓を告げ、地下の世界へと案内し、彼を勇気づける。地上に戻り失敗した作品を完成させ、シバの女王とも結ばれた彼は女王と共にエチオピアに赴いてその地を統一しようとする。しかし出発の前夜、再び職人の裏切りにあい暗殺されてしまう。次にこの挿話のモデルとなっている旧約聖書の逸話と人物について説明をしていきたいと思う。ソロモンは、イスラエル王ダビデ(引用部 ダビド)の息子であり、その後継者であった人物である。彼は知恵者として知られている。ソロモンが王位に即いた時、夢の中に主が現れ、「私はおまえに何をやろうか、欲しい物があれば言え」と言われた。そこでソロモンは「善悪を区別し、民を裁くことのできる分別ある心をおのしもべにお与え下さい。」と答えた。主はこの答えを好意をもって聞かれ、次のように答えた²⁾。

おまえは自分の長寿も富も敵の命も求めず、知恵をもって裁くことを願った。私はおまえの願いをかなえよう、おまえ以前には一人もなく、おまえ以後に出ることのないほどの鋭い知恵ある心をお与えよう。その上おまえの求めなかったこと、すなわち富と光栄もお与えよう。王の中でおまえと肩を並べよう者は一人も出ないであろう。おまえの父ダビドの行ったように、私のおきてと命令を守って主の道を歩めば、長い命をお与えよう。(列王記上 3:11-15)

このエピソードが物語っているように、ソロモンの知

恵の豊かさ、広さ、鋭さは主から授かったとしか言いようのないものだった。聖書の中で彼の名が冠せられている詩編やそのすべてが彼自身の作ではなく、後世の作に彼の名を付けたものも多い箴言、伝道（ユレヒト）の書、雅歌、知恵の書などを見ても彼の卓越した知恵と才能は明らかである。またその公正な裁判によって民衆からも信頼を得たとされる一方で、非情とも言える程、次々に自分の反対者を殺し、地位を安定させ、国家的な改革を進め、貿易の手腕もふるったと言われている。その知恵と20年の歳月をかけた宮殿と神殿建設という偉業によってイスラエルを繁栄させ、「ソロモンの栄華」という言葉がある程、後世に名を馳せた人物である。シバの女王は、この遠く東方、エジプトにまで伝わったソロモンの名声と知恵を聞いて、難問によって彼を試みようとして、現在のサウジ・アラビアの中心部にあたるシバから二千キロも離れたエルサレムにやって来た。乳香、没薬、肉桂など当時の人々が欲しがっていた品々の特産地、また通商路であった南アラビアを支配していたシバは、巨大な富を有していた。この国の女王がソロモンを訪問したのは、交易の交渉が目的とされているが、個人的な興味もあったとされている。聖書には、

シバの女王はソロモンのうわさを聞き、なぞをつかって彼を試そうと思ひ、旅に出た。香料と巨額の黄金、宝石をのせた数多いらくだを連れて、彼女はエルサレムに着いた。(列王記上 10. 1-4)

と記されているが、謎を解くことは、アラビア人の教養のひとつでもあった¹。そして、女王はソロモンの知恵と彼の建てた宮殿の壮麗さ、豪華な食事、列座の家来たちの礼儀作法やソロモンが神殿で捧げた燔祭（供えられた動物を祭壇で全部焼いて神に捧げること）の厳かさ、それらすべてに心を奪われ、かつてないほどの金と香料と宝石をソロモンに贈ったとされている。また、聖書には女王の名は記されていないが、エチオピアにはエチオピア王朝の権威付けのために創作されたこの物語のエチオピア版がある。女王の名はマケドと言ひソロモンの子を連れて帰ったことになっている。イスラム教徒の中にもアラビア版があり、名はバルキスとなっている。いずれにしても、この物語が作成される歴史的背景は実証されても、物語そのものは歴史的事実を述べたものではない。しかし、後世の人々の好奇心を刺激し、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教とそれぞれの世界で独自の展開がされたことで

より一層、ソロモンの卓越した知恵と繁栄が浮き彫りにされたと言える。一方、アドニラムはダビデの治世末期から「徴用者の長²」として仕えたとされ、ソロモンの死後、イスラエルの分裂による王と民衆の仲裁のために派遣され、殺されることとなった人物であったが、それ以上の記載は見当たらない。ところで、ネルヴァルが東方旅行に携行したとされる『東方紀行覚書』の中に「ソロモンの分身、ダブル、彼の最良の部分もう一方（対称的存在の数々）を鼓舞しようとする³」と記されているように、ネルヴァルは始めはソロモンとその分身の物語を想定していたようだ。しかし決定稿では、ソロモンと分身との距離を聖書や東洋の伝説を用いることによってはかり、オリジナルな人物を作り出したと思われる。さらに物語を語るイスタンブールの講談師たちを次のように設定した。

(...) ils arrangent et développent un sujet traité déjà de diverses manières, ou fondé sur d'anciennes légendes. (...) Il s'agissait cette fois d'un roman destiné à peindre la gloire de ces antiques associations ouvrières auxquelles l'Orient a donné naissance. (p. 671)

これにより、聖書やイスラム、その他のいろいろな伝説伝承を自由に変形させることを可能にし、聖書のソロモン (Salomon) は「精霊達の」prince des génies という形容詞をつけた、魔法の指輪によって人間、精霊、自然を自由に扱うソリマン (Soliman) となった。シェーファーは、この固有名詞の使い分けで聖書の人物からネルヴァル固有の人物へ転換されたと述べている。そしてアドニラムは、聖書通りの徴用者の長としての人物と聖書の中の別の人物が合成され誕生した。もう一人の人物は聖書では次のように記されている。

ソロモン王は人をやってヒラムをティロから呼んだ。この人はネフタリ族のあるやもめの息子であり、父親はティロ生まれの青銅細工師であった。ヒラムは知恵も知識もすぐれ、青銅細工についても熟練していたので、ソロモンのもとに来て、注文を受けた仕事をやりとげた。(列王記上 7. 13-14)

ヒラムはまた青銅を鑄て海を造った。(列王記上 7. 23)

この人物は、ダビデの友人であったティロの王ヒラムが神殿建設のためにソロモンに任せさせた王と同名の

青銅細工師、神殿の建築家ヒラムであり、最高の賛辞をおくられたとされている。こうして「徴用者の長」であるアドニラムは高い能力を持った青銅細工師にもなった。またアドニラムはフリーメーソンの開祖と考えられている人物でもある。メーソン団員が「親方」の位に就く儀式において再現される「ヒラム伝説」をネルヴァルはほぼ原型通りに組み入れている。この結社の理想的な建築物であるソロモンの宮殿の建築者であり、悲劇的な死をとげたヒラム（アドニラム）の伝説はメーソン伝説の中でも象徴的な意味を持っている。こうして少しずつ、聖書の世界にさまざまな宗教の要素が加えられていく。

以上が聖書の中の人物像である。ソロモンは偉大な人物であり、その王国に仕えるアドニラム、そしてソロモンを訪問し、彼の素晴らしい世界に圧倒されるシバの女王という関係となっていることをおさえ、続く2章ではネルヴァルがこれらの人物をどのような形に変化させ描いているかをみていきたいと思う。

第2章 無力なるソリマン

アドニラムが『東方紀行』の数々の挿話の中で、唯一の成功者として登場する一方、ソリマンと名を変えたソロモンはネルヴァルの書く主人公の中でとりわけ負の部分を負っているように感じられる。まずその風貌についてみていこう。

Soliman était alors au retour de l'âge ; mais le bonheur, en gardant ses traits dans une perpétuelle sérénité, avait éloigné de son visage les rides et les tristes empreintes des passions profondes ; (p. 680)

歳老いた彼からは王の威厳はもはや感じられず、それどころか、全身を金で飾り立て、威厳を作ろうとしても、逆に滑稽にしか見えない。聖書に記されている「賢者ソロモン」の名に相応しくかつては名だたる聡明さを持っていたであろうソリマンは、その風貌においても、中身においても衰える一方であり、あるのは虚栄心の強い俗人の姿だけである。女王が彼に出した謎について、聖書の中では次のように記されている。

ソロモンの前に出た彼女は、心に抱いていたすべてのことを質問した。ソロモンは彼女の問いにすべて答えた。王に説明できなかった難問は一つとしてなかった。(列王記上 10. 2-3)

しかしネルヴァルは聖書の記述とは異なった姿を描き出す。

Soliman interpréta sans broncher les trois énigmes, grâce au grand prêtre Sadoc, qui, la veille, en avait payé comptant la solution au grand prêtre des Sabéens. (p. 682)

判じものを解き、文字遊びを解明する才能にかけては誰よりもたけていたソリマンも、今はそのようなことも諦めなくてはならなかった。しかし王としての体面を保たなければならないソリマンには、シバ人達の大祭司に答の代金を支払うという手段しか残ってなかったであろう。彼を取り巻く廷臣達についてもネルヴァルは大祭司ザドクからベナヤまでほぼ、旧約聖書に列挙されている人物を同じように取り入れている⁶⁾。しかしどの者もみな揶揄され、ベナヤにいたっては、「presque idio」(p. 681)と評されている。そしてアドニラムが女王の望みによって十万もの職人を集めた時、はじめて「民衆の存在がソリマンに明らかにされ」自分には無力できらびやかな僧侶や廷臣達のお供しかいないことに気付く。そして放心した彼はこう自問するのである。

«Quel est donc, se demandait Soliman rêveur, ce mortel qui soumet les hommes comme la reine commande aux habitants de l'air?... Un signe de sa main fait naître des armées ; mon peuple est à lui, et ma domination se voit réduite à un misérable troupeau de courtisans et de prêtres. Un mouvement de ses sourcils le ferait roi d'Israël.» (p. 699)

人民の存在を見せつけられ、ソリマンは自分が全知であると信じながら、人民の存在に気付かなかったばかりか、人民がみなアドニラムに仕え、アドニラムが少し眉を動かせば、自分の代わりにイスラエルの王となり得ることを悟らされ、自分が孤独であることに気付かされるのである。そして自分の教義の中で、人に働くことを勧め、怠け者を非難する一方で『伝道の書』⁷⁾では「この世の労苦から人はどんな利益を受けるのだろうか」と働くことを否定していることの矛盾をシバの女王に突かれている。こういった一連のソリマンの教義についてもネルヴァルは聖書を引用しながら例えば次のように手を加えている。(下線は引用者による)

“Jouissez de la vie avec les femmes pendant tous les jours de votre vie ; car c'est là votre partage dans le travail”,

etc. Vous y revenez souvent. D'où j'ai conclu qu'il vous sied de matérialiser votre peuple pour commander plus sûrement à des esclaves. (p. 684)

これは、『伝道の書』第9章9節から引用されている部分だが、聖書ではこのようになっている。（下線部は引用者による）

Jouissez de la vie avec la femme que vous aimez, pendant tous les jours de votre vie passagère, qui vous ont été donnés sous le soleil pendant tout le temps de votre vanité; car c'est là votre partage dans la vie et le travail qui vous exerce sous le soleil.⁸

下線部にあるように、「女性達」ではなく、「愛する妻」と楽しく暮らすようにと聖書は説いている。しかしネルヴァルはソリマンが人民を物質化して、奴隷化し、享乐的な生活に浸らせることによって容易に人民を支配することができるだろうというソリマンの考えを、バルキスの口を借りて批判している。民を物質化することは機械的な生を産み、民を命令に従うだけの奴隷とすることは、結局は王としての孤立の現れとなる。さらにもう一点、今度は聖書の中のソリマンの負の部分については次のように用いている。聖書の中でソロモンは、エジプト王ファラオの娘を妻に迎えていたが、この他に異国の女達を多く愛した。後宮の存在は、当時の風習からいってそれほど悪いことではなかったが、異邦の女たちと共に異邦の神々、つまり偶像が入って来たことが問題であった。

ソロモン王はファラオの娘のほかにも異国の女を多く愛した。モアブ、アンモン、エドム、シドン、ヘトの女たちであった。主はこの女たちについて、「おまえたちはこの女たちに近づいてはならない。その女たちもそばにこさせてはならない」と仰せられたことがあった。その民の女たちであった。「そうしないと、おまえたちは、その女たちの神々に心を傾けるようになる」と。それなのにソロモンはその女たちに執心した。ソロモンには七百人の妃と三百人のそばめがいた。この女たちは王の心を惑わした。（列王記上 11. 1-3）

ソロモンは女たちの歡心を買うために、彼女達の言いなりになり、シドン人の神ミルコム、モルク、モアブ人の神ケモン等々のそれぞれの拝殿を造ってやり、自らも礼拝するようになった。王のこの態度に民衆たちの間にも偶像崇拜がはびこり、唯一の主への忠誠を立国の精神としているイスラエルの危機が始まった。

そして、ソロモンの權威も失墜し、主が言われた通り、彼の死後王国は分裂を始める。このようなソロモンの姿を次のような姿でソリマンに投影させている。

Avide d'honneurs, de puissance et de voluptés, Soliman épousa cinq cents femmes, (...) L'anneau de Salomon lui soumit les génies, les vents et tous les animaux. Rassasié de pouvoir et de plaisirs, le sage allait répétant: «Mangez, aimez, buvez; le reste n'est qu'orgueil.»

Et, contradiction, étrange: il n'était pas heureux! ce roi, dégradé par la matière, aspirait à devenir immortel... (pp. 769-770.)

彼は死を恐れるあまり、女王から与えられた指輪の力を借りてあらゆる精霊たちを支配し、不死の力を得ようと試みる。カフ山に置かれた王座に腰を降ろした彼は、ここで全宇宙の精霊達の力を借りようとする。しかし精霊達が守り続けたのはソリマンの身体に過ぎず、永遠の命を創造したわけではない。その後、224年もの間、鬚を伸ばし、爪を伸ばし続けた彼は「死の中の眠り」に入ったと言われ、最後にはこなダニによってその身体をむしばまれ続け、ついに王座からくずれ落ちた。ソロモンの死について聖書では「ソロモンはエルサレムでイスラエル全土を四十年にわたって治めた。その後ソロモンは先祖とともに眠り、父ダビドの町に葬られた。息子のロボアムが王位を継いだ。」（列王記上 11. 42-43）とだけしか記されていない。この晩年の姿について、1851年に作品が二巻本で出版された際、資料的に巻末に付けられた補遺の中では次のように述べられている。

Le Coran attaque aussi fréquemment l'orgueil et les impiétés du roi Salomon dans la dernière partie de son règne.⁹⁾

この一文は、ユダヤ教徒の中で晩年ソロモンが多神教徒の妻を娶ったり、本文には出てこないが、神殿に偶像を置いたとされる部分が否定されていることを示しているように思われる。そしてネルヴァルは、聖書からではなく、「われわれが彼の死を定めたとき、ジンドムには、彼の死は教えられなかった。ただ一匹の虫がいて、彼の杖を食べた。ソロモンが倒れたとき、ジンドムは見えないものを見ていれば、何も恥をしのんで労苦に耐えなくてもよかったのに、と思った」¹⁰⁾と書かれているコーランの34章にソリマンの晩年の姿を写することによって、コーランの中で予言者かつ王として、鳥や動物と話す超能力を有し、風やジンを操

る叡智を授かったとするスライマーン（ソロモン）もモデルにしていることが伺える。これらのことから、ネルヴァルがソロモンという聖書上の偉大な人物を完全に揶揄し、卑小な人物に変えてしまっていることが見てとれるだろう。ソロモンなる人物は、その風貌、人格、能力においてもすべて魅力のない人物となり、本来ならば彼を讃える存在として登場するシバの女王の登場によってますます劣った人物となる。このように「シバの女王のエルサレム訪問」の話自体を変化させることによってキリスト教的な世界をある部分で否定しているのではないだろうか、と考えることができる。ではアドニラムの方はどうであろうか。次の3章でみていきたいと思う。

第3章 秘義入門者としてのアドニラム

ジルベール・ルーージュが「正確な題名はむしろ『朝の女王とアドニラムの物語』であろう」¹¹⁾と指摘するように、物語の正統な主人公はアドニラムと言える。その人物像は、次のように描写されている。

C'était un personnage sombre, mystérieux. (...) son éclatant et audacieux génie le plaçait au-dessus des hommes, qui ne se sentaient point ses frères. (p. 672)

アドニラムは、夢中で想をめぐらし、さらに熱中してソロモンの神殿建築に専念している。そのため寝食も忘れ、娯楽も宴会の楽しみも放棄している孤独な職人として描かれている。そしてシオンの大地に「青銅の海」¹²⁾と呼ばれる巨大な水盤を鑄造しようとしている。これは、途方もない作業であり「un défi du génie aux préjugés humains, à la nature, à l'opinion des plus experts」(p. 711)であり、アドニラムの名が不朽になるか、失墜させるものになるかはこの仕事の成否にかかっている。青銅の海にそそがれる溶銅の流れを見てシバの女王は思わず感嘆の声をあげる。

«Spectacle sublime! s'écrie la reine de Saba. Ô grandeur! ô puissance du génie de ce mortel, qui soumet les éléments et dompte la nature! (...)» (p. 715)

ところが、工事の最後の段階で三人の裏切り者が作業を妨害したため銅は鑄型から溢れだし、工事は失敗する。ここからネルヴァルは部下達からも見捨てられ、絶望したアドニラムに試練を与え「冥界下り」という形で火の種族への秘義入門者として登場させるのであ

る。アドニラムにとっての試練とは、地下の世界に降りて行き、そこで自分の祖先から啓示を受けることであった。この試練は次のような段階を経て達成される。

まず、アドニラムは幻となって現れた祖先トバル＝カイン（聖書の中では鍛冶職人であり創世記4.22では「青銅や鉄のすべての刃物を鍛える者」とされる）に連れられて「深まりゆく静寂と闇の領域」へと進んで行き、現実世界の束縛から解放され、次のように感じる。

Adoniram exhala un long et doux soupir: il lui semblait qu'un poids accablant, qui toujours l'avait courbé dans la vie, venait de s'évanouir pour la première fois. (p. 719)

この地下の世界は「火の聖域」であり、トバル＝カインとアドニラムの共通の先祖であるカインの一族が、嫉妬深い神アドナイの圧制を逃れて、自由に暮らしている世界である。ここはアドニラムが現実の仕事から解放され、自分達の祖先と再会し、自分達一族が不滅であることを知り、自分達が分け合っている運命について語ることが出来る場所である。そして、次にアドニラムは直接カインの口から、

(...) Tu sais le reste; mais ce que tu ignores, c'est que la réprobation d'Adonai, me condamnant à la stérilité, donnait pour épouse au jeune Habel notre sœur Aclinia dont j'étais aimé. (p. 724)

と教えられ、人類に知恵を授ける恩人でありながら迫害を受けなければならないエブリス（サタン）の子であるカインの種族と、無能で高慢なアドナイの子孫との間に起こった最愛の女性をめぐる争いが、地上でも繰り返されることを知る。この地下世界の住人達とここで繰り返された最初の争いとは創世記「カインのアベル殺し」の挿話を意味している。兄弟が捧げ物をした時、神はアベルの供え物を心から受け入れ、カインのものを顧みなかった。怒ったカインは「弟のアベルにおそいかかってアベルを殺してしまった」（創世記4.8）。主は言われた。「何をしたのか。大地から、私に向かって叫ぶおまえの弟の血の音が聞こえる」（創世記4.10）。こうして呪われる者となったカインは「しるし」を付けられて、エデンから追放され自分の子の名前をつけたエノクの町で暮らした。この挿話をネルヴァルは地下世界で再現し、「お前の弟アベル

はどこにいるのか」(創世記4.9)という主の問いかけの言葉を「Habel, mon fils, Habel, Habel! . . . qu'as-tu fait de ton frère Habel? . . .」(p. 724)と養父アダムに語らせる一方、「Lui aussi! (. . .) jamais il m'a pardonné. — Jamais! . . .」(p. 724)という神と両親による不公平と、最愛の妹アクリニアを奪われたことへの嘆きと、アベル殺しの責め苦のために大地をのたうちまわるカインの姿を示している。そして、その子孫達は神に呪われた種族には違いないが、地下の世界では人類に知恵をもたらし、その火を守り続ける一族(イラデ、メホヤエル、レメクといった)を聖書に出てくる通りに用いながら描いている。こうした地下での争いは、才能において勝っているが、地上でアドナイの無能な僕であるソリマンに王位を譲り、シバの女王を奪われようとしているアドニラムとソリマンの闘いを意味している。そしてさらにトバル＝カインは

(. . .) Les génies du feu viendront à ton aide; ose tout; tu es réservé à la perte de Soliman, ce fidèle serviteur d'Adonai. (p. 729)

とアドニラムに運命を成就させるように励まし、一本の槌を与え、それによりアドニラムは失敗しかけた「青銅の海」を見事に完成させる。そして、同じ「火の子孫」であるシバの女王と結ばれる運命にあることを悟り、次のように告げる。

Balkis, esprit de lumière, ma sœur, mon épouse, enfin je vous ai trouvée! Seuls sur la terre vous et moi, nous commandons à ce messager ailé des génies du feu dont nous sommes descendus. (p. 741)

対するバルキスも手を差し伸べながら「(. . .) d'après l'arrêt du destin, il ne m'est pas permis d'accueillir un autre amour que celui d'Adoniram.» (p. 741)と答えるのだ。

こうした試練を経て、最愛の女性を得た入門者アドニラムも、最後の試練を受けなければならない。最後に、アドニラムは親方の給与を得ようと試みた三人の裏切り者によって殺されてしまうが、種族としての永遠の生を受けることになる。つまり、アドナイに対する反逆者としての運命を成就させたアドニラムは、命を奪われることになるが、バルキスとの間に子供を授かることによって、その精神は彼女と永遠に結ばれ種族の生は保たれるのである。そして死後、アドニラム

は、自らの建築した神殿に葬られ、残された他の職人の親方達はこの殺害の復讐を心に誓う。これは「死と再生」の真理を秘義伝授によって追求するフリーメーソンの伝説そのものである。

以上のように、ネルヴァルは、聖書の中では人物としては優れてはいるが、存在としては決してソロモンと対等とは言えない「徴用者の長」であり、職人であるアドニラムをカインの裔ではあるが罪の苦さのない、自らの運命を全うする秘義入門者として描いていることが分かる。そして地下の世界に聖書のモチーフを入れているが、悪としての印象はない。これによってネルヴァルが、単にキリスト教の否定をしているというよりは神秘主義といった異教との混合に関心を示していたのではないかと考えられるだろう。それでは最後にシバの女王バルキスについてもみていきたいと思う。

第4章 神の暗示

シバの女王についても、聖書の中ではその容姿や人柄についてはあまり述べられていない。しかし、『東方紀行覚書』の中に「シバの女王がソロモンの妃となるのが運命の定めだったのだ。(最も美しい女性と最も賢い男)」¹³とあるように聖書に出てくる「賢者ソロモン」に相応しい聡明で機知に優れた女性として登場する。聖書の中では

シバの女王はソロモンの知恵、その建てた王宮、その食卓の料理、家来たちの住まい、彼らの奉仕、彼らの服装、給仕たち、主の神殿にささげる王の燔祭を見た時、息絶えんばかりに驚き、王に言った。「(. . .) あなたの知恵と繁栄は私の耳にしたこと以上のものでした(. . .)」(列王記上 10. 4-7)

とこのように女王はソロモンを賞賛する。他方、ネルヴァルにおいてはソリマンの優位性は消え、すでに一章で示したように、優位に立ったのはシバの女王の方であった。彼女は麻の織物と透き通った紗に包まれた自分の簡素な服装を弁解する上で

«La simplicité des vêtements, dit-elle, convient à l'opulence et ne messied pas à la grandeur. (. . .)» (p. 680)

とこのような言葉をかけ、王冠から足元に至るまで全身を金で覆ったソリマンの姿を皮肉っている。

そして「南の国の女王」であると同時に「朝の女王」である彼女はこの挿話の中で大きな役割を担っている。それは地下の世界で、そして地上の世界で繰り返し行われる種族間の争いに差し込む光としての存在である。種族と種族の争いの根本は神の不在が原因であると考えられる。トバル＝カインによると、神の創造とは卑小なものであり、その力の象徴であるアドナイの太陽も「卵を焼く力もない欠陥のあるかまど」である。そして地下で中心の火を守る神に嫉妬をし、人間及び地球の中心と表面の間に殻を作り、火の放射を妨げ、熱が地下から地球の表面ににじみ出て人を温めないように試みている。さらに火の精霊たちを無視して泥の人間を造った。トバル＝カインは、自分達火の一族が地底へと追いやられた屈辱を思い出し、アドナイを「狡猾で嫉妬深い」と批判し、熱のない太陽は、地上のすべてを照らしている。このアドナイの神への怒りが不調和を生み出している。そしてこの神は地上を支配し、地下の火の世界の創造が地上へと噴き上がるのをつねに妨げている。この地上と地下の構図は、正統と異端という構図にもあてはまる。1844年に「アルチスト」誌に掲載された『ディオラマ』の記事の中で、ネルヴァルは、エノクの町を「嫌悪すべき町」と表現し、常に Eloims と複数形で表されるエロイムは「神々の」という多神教の神を示し、アドナイはそのエロイムの一人にしかすぎないと述べている。そして、教会はこの異端的な考えを認めてはいない。としている。ここにもネルヴァルはキリスト教に対する異端的な考えを織り交ぜている。しかし、そのようなアドナイの冷たい太陽とは反対に自然の太陽の光をシバの女王は持っている。彼女は太陽の出ているうちに異邦（エルサレム）へ入ることを拒み、「太陽の最初の光と共にエルサレムの東門を越えた」とされ、その姿はベノニの言葉を借りると「昇ってくる太陽を垣間見るよう」とされている。彼女はアドニラムを賞賛した際、黄金の三角に縁取られた太陽のペンダントを贈り、ソリマンには太陽の力で魔力を発する指輪を贈っている。シバの女王は、まさに「太陽の光」であるといえる。そして、ソリマンとのやり取りの中で祭壇を置くためにノアの残した木を切ってしまった彼に対し次のように告げる。

— Insensé! qui peut effacer ce qui est écrit au livre de Dieu?
Et quel serait le succès de ta sagesse substituée à la volonté
suprême? Prosterne-toi devant les décrets que ne peut pénétrer
ton esprit matériel: ce supplice sauvera seul ton nom

de l'oubli, et fera luire sur ta maison l'auréole d'une gloire
immortelle . . . (pp. 692–693.)

彼女はソリマンの不敬虔さを非難すると同時に受難を受けることによって救いがあると述べている。この救いを与えるのは、至高の存在としての神の存在であり、その神こそキリストと言えるのではないだろうか。不滅の、赦しの神である。また、「神を試したり、神の創造物を修正したりしてはいけない」と言うソリマンに対して、女王は「ソリマンの信仰に対する偏見が、科学の進歩や才能の飛翔を妨げ、神を卑小化し、神を否定することになる」¹⁴⁾と神の力を自分の権力とし、神を物質化 *matérialiser* しようとしているソロモンの狭い見方を批判し、警告している。ここでも彼女の口から出るのは肯定的な神の姿であり、調和をもたらず神といえるだろう。しかし『東方紀行』の中ではこの調和は実現されることはなかったと言える。両種族の間において、調和をもたらず可能性を秘めていたシバの女王も自らが火の種族であることを知り、真っ暗な闇の中をアドニラムの元へ逃避行を続けるからだ。シバの女王の場合、人物像としては聖書に描かれている姿とあまり差は見られない。しかし完璧に果たされたわけではないが、聖書では想定されていない「神を暗示する」という役割を与えられていると考えられる。

おわりに

各章において登場人物がどのように聖書に描かれているかをみてきたが、この物語の中でソリマン、アドニラム、シバの女王バルキスがどのような関係にあるのかまとめておきたいと思う。一章ではソロモンは偉大な人物であり、その王国に仕えるアドニラム、そしてソロモンを訪問し、彼の素晴らしい世界に圧倒されるシバの女王という関係となっていると述べたが、ネルヴァルは、まずアドニラムをヒーローとし、バルキスを軸にして対称的な存在としてソリマンを描いていると言える。バルキスに出会うことによってアドニラムは栄光と女王とのつながりという幸福を得、ソリマンは失恋により自ら破滅の道を歩むことになったといえる。

そして、この物語はネルヴァルの他の作品にも影響を及ぼしている。アドニラムの「冥界下り」のエピソードはのち1853年に発表された『オーレリア』の中で再現されている。主人公である「私」は地下の世界

を訪問し、自分がカインの末裔であり、同じく神から呪われた一族であると語っているが、『オーレリア』の中では地下に隠れて自分達の財宝を守り、時には隠れ家を出て生者を脅かす悪の化身として描かれている。またシバの女王による調和の兆しも同じく、『オーレリア』によって達成されている。『オーレリア』の「記憶すべきことども」において「私」の傍に現れ、秘義入門の最後の道程を示し、名前は出て来ないが、赦しを与える救世主との仲介をする「イエーメンの香りのしみついた髪を宙に浸した」偉大な女性の友として聖母マリア、オーレリアの像と重なって永遠の女神イシス像を形成する一要因として間接的に登場していると言える。そしてこのシバの女王が、1852年に発表された『ボヘミアの小さな城』の中で当時、ネルヴァルが心を占めていた女性として回想されていること。また生前には実を結ばなかったが、当時憧れの女優ジェニー・コロンを主演にした『シバの女王』と題するオペラの構想に没頭していたことを考えると、まさにシバの女王はネルヴァルにとっての理想の女性の姿であり、女神イシスのイメージを持っていたことも付け加えておきたい。

では、一体ネルヴァルは旧約聖書をモチーフにして書いたこの物語の中で、何を意図していたのだろうか。聖書で偉大だとされているソロモンは揶揄されることによって、反キリスト教的な形となって現れ、同時にアドニラムを神秘主義の秘義入門者とすることによって、キリスト教とは違う宗教との共存をはかっているように思われる。そしてその両者の間で仲介的な役割を果たす朝の女王バルキスは調和をもたらす神の存在を暗示している。そうすることによって、異教とキリスト教のどちらも認めようとしたのではないだろうか。そして両者は決して対立するものではなく、全ての信仰の統合 *syncretisme* をネルヴァルは願い、それ故に葛藤していたのではないかと結論付けたいと思う。そしてこの願いと葛藤は『オーレリア』への橋渡しとなっていることを付け加えておきたい。

注

1) 1843年12月24日付の父への手紙の中の一文

(...) Ce voyage n'eût-il fait que me remettre en bonne disposition et liberté d'esprit, ce serait déjà un grand point. (Gérard de Nerval, *Correspondance, Œuvres complètes, t. I*, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1989, p. 1410.)

2) 列王記上 3. 5-9までの記述。以下5. 9-11には「神はソロモンに偉大な知恵と洞察力を与えられ、海辺の砂浜ほどにも広い心を与えられた。それゆえソロモンの知恵は東の国の子らすべての知恵にまさり、エジプト人のすべての知恵をも越えていた。ソロモンは誰よりも賢かった」という記述が見られる。

3) 聖書の世界では人目を惹く印象的な言葉や謎の熟練した使用は高く評価された。

4) 列王記上 4. 6に「アブダの子アドニラムは徴用者の長」という表現がある。

5) Le double de Soliman. Les meilleures parties de lui allaient animer l'autre. (antipodes) (Gérard de Nerval, *Carnet de notes du Voyage en orient, Œuvres complètes, t. II*, texte établi, présenté et annoté par Albert Béguin et Jean Richer, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1961, p. 710.)

6) 列王記上 4. 1-6に以下の高官のリストがある。「ソロモン王はイスラエル全土の王となった。彼の高官は次のとおりである、サドクの子アザリアは祭司。シャウシャの子エリホレフとアヒアは書記官、アヒルドの子ヨザファトは儀典官、エホヤダの子ベナヤは軍隊の指揮官。サドクとエビアタルは祭司。ナタンの子アザリアは総監の長。ナタンの子ザブドは祭司で王の近臣。アヒシャルは侍従長。アブダの子アドニラムは徴用者の長。」となっており、本文でも名前と役職はこの記述通りに用いられている。

7) 伝道の書 1. 3

8) *La Bible, l'Écclésiaste 9: 9*, Traduction de Lemaître de Sacy, Robert Laffont, 1999.

9) Gérard de Nerval, *Voyage en orient, Appendice, IV, La légende de Soliman, Œuvres complètes, t. II*, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1984, p. 837.

10) 『コーラン』第34章、藤本勝次編集『コーラン』、中央公論社、1970。

11) «Notons que le titre correct serait plutôt *HISTOIRE DE LD RAINE DU MATIN ET D'ADONIRAM*» (Gérard de Nerval, *Voyage en orient, Œuvres complètes, t. II*, 1961, p. 1374.)

12) 列王記上 7: 23-26に記述がある。この水盤の水は祭司たちの清めのために用いられたとされている。

13) Les destinées avaient fait que la reine Saba devait être l'épouse de Salomon. (la plus belle et le plus sage) (Gérard de Nerval, *Carnet de notes du Voyage en orient, Œuvres complètes, t. II*, 1961, p. 711.)

14) (...) En le croyant jaloux, ce Dieu, vous limitez sa toute-puissance, vous défiez vos facultés, et vous matérialisez les siennes. Ô roi! les préjugés de votre culte entraveront un jour le progrès des sciences, l'élan du génie, et quand les hommes seront rapetissés, ils rapetisseront Dieu à leur taille, et finiront par le nier. (pp. 703-704.)

※テキストは以下のものを使用し、ページ数は各引用末尾に示す。

Gérard de Nerval, *Œuvres complètes, t. II*, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1984.

※旧約聖書からの引用は全てフェデリコ・バルバロ訳『聖書』からのもので引用末尾にその箇所を示す。フェデリコ・バルバロ訳『聖書』, 講談社, 1980。

参考文献

Gérard de Nerval, *Œuvres complètes, t. I*, édition publiée sous la direction de Jean Guillaume et de Claude Pichois, Galli-

ard, Bibliothèque de la Pléiade, 1989.

Gérard Shaeffer, *Le voyage en Orient de Nerval*, La Baconnière, 1967.

Rosie Chambers, *Gérard de Nerval et la poésie du voyage*, José Corti, 1969.

野崎 敏, 橋本 網訳『ネルヴァル全集』Ⅲ (東方の幻), 筑摩書房, 1998。

大濱 甫『イシス幻想』, 芸立出版, 1986。

篠田知和基『ネルヴァルの生涯と文学』, 牧神社, 1977。

永井 明『聖書の人物』, 中央出版社, 1977。

聖書大事典編集委員会『聖書大事典』, 教文館, 1989。

藤本鈴恵『列王記』, 新教出版社, 1994。